

## 風化する歴史

これから、長春の散策を始めようとしている。

この街はかつて新京とよばれ、満州国（1932～1945年）の建国から崩壊まで13年間にわたり首都として機能し、最も多い時には約10万人の日本人が居住していた。戦前、戦中世代には新京や満州国という名前に強いノスタルジーやある種の痛みを感じる人たちがいる。その一方、戦後世代にとって、これらの都市や国の名前は歴史科目の暗記事項にすらならないことがあることも事実である。敗戦国日本は、戦後、戦争のおいを消し去り、忘れ去ることに努めてきた感がある。このため、研究者の発言や専門書の記述以外の部分で満州国の実相に触れることは難しい。自ら起した戦争が、その張本人によって風化させられている、と言っほかない。

中国では満州国のことを、偽満「あるいは、偽満州国」と表現し、大日本帝国の不当な侵略行為を出版物、教科書、メディアを使って告発し続けている。

一方では過去をすでに風化した歴史として忘却し、もう一方では絞れば鮮血が滴り落ちるようなレアな現実と捉える認識の差が日中両国を隔ている。このことが、国交回復30周年を迎えた

## 特集

中村達雄 文「写真」  
text & photo : Nakamura Tatsuo



の 幻 都 を 歩 く

現在に到るも、解決の糸口を見つけない  
歴史認識問題の頑固な病巣になっ  
てると言っても差し支えない。

## 革命政権は 旧国家の配線を使う

長春の街は二筋の大街、二つの広場  
そして一筋の繁華な街路がその主要な  
骨格を作っている。二筋の大街とは人民  
大街と新民大街を指す。それぞれ幅員  
（道路幅）が広く、街路樹などを取り払  
えば立派な滑走路としても使えそう  
だ。二つの広場は、この街を南北に貫く  
メインストリート 人民大街のちょ  
うど真ん中に位置する人民広場、そし  
て新民大街の突き当たりに展開する文  
化広場のことである。繁華な街路とは重  
慶路を指している。再開発された地区に  
シャングリラホテルや百貨大楼、ファ  
ーストフード店、露天商などが蝟集し、土  
地の若者が群れ集まり、省内外から登  
ってきた旅行者で雑踏する。

1930年代に発行された「新京市  
街地図」には、人民大街が大同大街、新  
民大街が順天大街と記されている。さ  
らに人民広場は大同広場、文化広場は  
順天広場となっているが、街全体を覆う  
街路の区画、道路の配置は、現在、ほ  
んど変わっていない。ベネディクト・アン

神武殿

# 長春

満州



ダーソンがその著、増補 想像の共同体(NTT出版、1997年)で、革命政権は旧国家の配線をそのまま使用する、と指摘したが、長春の街並みはそれをそのまま裏付けているかのようである。それは満州国時代に進められた、国都(新京)の都市建設が、70年以上を隔てた今でも使用に耐えていることの証左にほかならない。世界でもまれに見る優秀な都市計画と賞賛された所以である。

そろそろ長春の散策に出発しなければならぬ。第一歩はこの街の臍、人民広場界隈から始める。

## 戦国の城 関東軍司令部

人民広場(旧大同広場)を循環するロタリーの北西角には、荘重とも表現すべき中国人民銀行大樓がどしりと構えている。これは旧満州中央銀行総行(本店)で、ルネサンス様式による四階建ての建築物だ。爆撃を受けても破壊されないよう配慮された満州初の鉄筋コンクリート構造だという。全国の中国人民銀行の中で、最も重厚で威厳ある建物としてその雄姿を誇る。銀行の西隣りは吉林省電信公司以、満州国時代は首都放送局の建物だった。ロタリーの南西角には、緑の屋根瓦が美しい長春市公安局がある。この建物も、かつては新京首都

警察庁が所有していた。

人民広場から北に1キロメートルほど登っていくと、人民大街と新發路(旧名も同じ)が交叉する北西角に長春で最も美しいとされる建物が視界に入ってくる。鉄筋コンクリート造りの構造物に日本風の屋根を載せたいわゆる帝冠様式とよばれる建築で、その威容は戦国の城と見紛うほどである。ここは関東軍司令部があつたところで、現在は吉林省共産党委員会が使っている。関東軍は満州国を實質支配した最高権力機関だった。そこに、今、吉林省を統括する共産党委員会が入居している。革命政権の多くが旧国家の配線をそのまま利用するとはすでに述べたことだが、使用する配線にもおのずと格付けがあるようだ。現在、最高権力を握る組織は、やはり、過去において最高位にあつた権力機関の居城に入りたがるものらしい。

戦国の城を右手に見ながら新發路を西に進む。前方に鬱蒼とした森が忽然と現れ、樹林の奥の方に尖塔を戴いた煉瓦造りの瀟洒な洋館が見えてきた。服務員に建物の由来をたずねると、周囲をはばかりように小さな声で、

「むかし、関東軍司令官の官邸でした」という返事がかえってきた。  
本庄繁ら歴代の司令官が住んだところだ。関東軍司令官は皇帝の上位に立つ





「太上皇」だった。現在、松苑賓館の高級宴会場として使われている官邸は、愛新覚羅・溥儀が正室の婉容らと暮らした仮宮殿（偽皇宮）よりもはるかに贅を尽したものだ。

人民大街をさらに北上して長春駅界隈まで足を伸ばしてみる。駅舎はガラス張りの現代的なビルに化けて味気ない。ヤマトホテルも春誼賓館といつ二流ホテルに改装されて、昔の面影を偲ぶことは出来なかった。かつて歓楽街だった吉野町（現長江路）の街路を照らした享楽のネオンはとくの昔に撤去されてしまったらしく、路地の入口にあった郵便局（現長春市郵局）の建物が寂しく老醜をさらしている。

### 新京首都計画の礎

駅前から車で人民大街を南下して文化広場に向かう。途中、新京の首都計画のことなどを考えた。計画の礎を築いたのは、時代が前後するが、台湾総督府の民政長官として植民地経営に辣腕を振るった後、1906年に初代の南満州鉄道総裁に就任した後藤新平の努力に負うところが大きい。後藤は満鉄付属地における市街地計画で、一等道路の幅員を二〇間（約36メートル）にすることに固執した。当時としては破天荒な広さ

の道路幅だった。この措置が26年後に始まる満州国の首都建設に大いに役立つたのである。余談になるが、後年、東京市長に就任した後藤は関東大震災（1923年）に遭遇し、壊滅状態だった帝都の復興を見事に乗り切っている。都市計画に卓見があった、というほかない。

車は人民広場を通り越し、松林が美しい牡丹園（旧牡丹公園）の入口に停車した。ここには長春市の重点文物に指定された神武殿が保存されている。神武殿とは武道館のことだが、今は吉林大学の講堂として使われている。内部には木製の椅子がところ狭しと並び、舞台の奥には銀幕が張つてある。ここで集会や映画会を開くのだろう。庭には近隣の人たちが整列し、扇の舞いを踊っていた。

上段右から順に

- 中国人民銀行（旧満州中央銀行）
- 吉林省電信公司（旧放送局）
- 文化広場に面した吉林大学（幻の帝宮）
- 長春市公安局（旧新京警察）

下段右から順に

- 旧関東軍司令官官邸
- 新民大街に面した吉林大学（旧司法部）
- ベチューン医科大（旧國務院）
- 共産党委員会ビル（旧関東軍司令部）





【上】緝熙樓（偽皇宮）階廊下。肖像写真は愛新覺羅・溥儀

【下右】勤民樓（偽皇宮）、溥儀の執務処

【下左】勤民樓の中庭



## 幻の帝宮

人民大街をさらに南下して解放大路（旧興仁大路）を右折すると、やがて右手に広大な緑地帯が展開する。文化広場（順天広場）である。広場の北端には執政から皇帝に即位（1934年）した愛新覺羅・溥儀のために新宮殿（帝宮）の建設が計画された（1938年）が、大日本帝国の敗戦で完成に到らず、溥儀がここに

住まう機会はなかった。未完の宮殿は戦後、地質学院の校舎として完工し、同学院はその後科学技術大学に改組され、数年前に吉林大学に吸収合併された。

文化広場から南の郊外に伸びているのが新民大街である。旧名を順天大街という。中国の正史、明史などを読むと、頻繁に「大祀天地於南郊」南郊に於いて大いに天地を祀る」という表現にぶつかると、これは天を祀る王朝儀礼の祭壇が南郊に置かれていたことを示している。新宮殿が落成していれば、皇帝溥儀は新宮殿から順天大街を進み、南郊壇に天を祀る儀礼を行った筈であった。

順天大街沿いには、満州国の国政を司る八つの政府機関が置かれた。その建物は現在もある。順天広場側から南に向かって順番に、満州国國務院（ベチューン医科大学、数年前に吉林大学に吸収合併）、軍事部、吉林大學第一醫院、司法

部（吉林大學）、經濟部（吉林大學第三醫院）、交通部（長春中医学院附属醫院）、最高裁の中央法衙（解放軍第四六一醫院）、農業者部（師範大學附属中学）、文教部（師範大學附属小学）の八機関でこれを総称して偽滿八大部とよぶ。

偽滿八大部のうち農業部と文教部を除いた六機関の建物は、繰り返しになるが、鉄筋コンクリート造りの構造物に日本風あるいは中国風の屋根を載せたいわゆる帝冠様式とよばれる建築で、興亜式またはアジア主義様式ともいわれる。満州国は建前として五族共和（日、満、蒙、鮮、漢）を謳っていた。そのため、建築様式にも東亜の民族性を具現する必要があったのだ。八大部の建物はそれぞれに威厳ある重厚な設計だが、中央法衙（解放軍第四六一醫院）の大棟はひととき美しく、煉瓦造りの優美な曲線が見る者の心を捉えて離さない。

夕刻近く、南湖の西側、湖西路沿いにある長春電影製片廠を訪ねた。ここはかつて陸軍憲兵大尉の甘粕正彦が理事長を務めていた満州映画協会だった。甘粕は関東軍と結託して特務工作に従事し、満州国統治に絶大な発言力を有した実力者であった。「昼は関東軍司令部が満州国を支配し、夜は甘粕が支配する」とまで畏れられた陰の謀略家でもあった。1945年8月18日午前1時、ソ連参

## 長春市の概要

吉林省の省都。北海道の知床半島、千島列島の国後島と同緯度帯にあり、冬季は酷寒。人口約280万人は全国12位で、ハルピンや南京と同規模。市街地は南北約20キロ、東西約15キロで、旧新京時代の街並みをほぼそのまま継承している。満映を前身とする長春電影製片廠は業界のトップレベルを誇り、中国における映画揺籃の地として知られる。重工業が発達し、高級乗用車のアウディや红旗を生産する第一汽車製造は中国の自動車産業を牽引している。市内は公園、広場、緑地帯が多く、清潔で広々として快適である。道路の植え込みや公園の樹林には松の木が多い。

## 長春への行き方

中国のたいていの主用都市からは航空機の便があり、北方航空、東方航空、南方航空、中国国際航空などが就航している。この他、韓国の仁川国際空港からアジアナ航空、中国北方航空が1時間30分で長春との間を結んでいる。

汽車なら北京から快速で10時間30分。長春直行便以外にハルピン、ジャムス行きなども長春に停車し、切符も比較的買いやすい。

## おすすめツアー

中国と北朝鮮の国境上にある長白山(朝鮮名:白頭山、海拔2691m)への各種バス、汽車ツアーが面白い。二泊三日で天池や瀑布、温泉などを観光する。費用は680元(大人1人、途中食費込み)から。申し込みは主要ホテルのツアー・デスクで。

## ホテル

長白山賓館  
新民大街16号  
Tel: 431-5526555  
Fax: 431-5642003

南湖公園正門に近い閑静な環境。朝鮮、中華料理レストランのほか、サウナ&マッサージ施設などもある。韓国人観光客が多い。宿泊料350元~

南湖賓館  
南湖大路2号  
Tel: 431-5683571  
Fax: 431-5682559

南湖公園内の高級幹部招待所を兼ねた高級ホテル。各種レストランあり。市街地から離れているので外出に不便。静養したい人には最適。宿泊料270元~(エアコン無し)

## 散策の終りに

満州国は柳条湖で満鉄線を爆破九・一八事変(1931年)し、それを中国軍隊の仕業に捏造した関東軍の謀略から生まれた。関東軍の行動は、国内で統帥権を楯に内閣機能を骨抜きにして暴走

戦、大日本帝国のポツダム宣言受諾を受け、皇帝溥儀は満州国解体と皇帝退位の詔書を読み上げ、この国は13年の教奇な歴史に幕を閉じた。ちよつとその時刻、満州映画協会の理事長室の黒板に甘粕の筆跡で、大ばくち、もとも子もなく、すつてんでん」という文句がなぐり書きされた。山室信一『キメラ 満州国の肖像』中公新書、一九九三年)という。この文言は甘粕にとつて、そして関東軍にとつても、満州国経営が大博打であったことを物語っていた。

した陸軍当局によつても支えられた。このことを考えるとき思い浮かぶのは王道楽土という言葉である。傀儡国家の建設という横車を押し通すためにひねり出した美言というほかない。今となつては、むなししい響きだけがこだまする。関東軍の謀略と、それをプロパガンダする絵空事が複雑なねじれ現象を見せながら進んだ満州国の経営は、日米開戦にともなう太平洋戦争の敗北で当然のことながら破綻した。王道楽土の建設どころか、それを推進した大日本帝国さえをも滅ぼしてしまつたのである。「何故に旧時代の建物を保存活用しているのか」と問うたという。吉林省の役人は、「日本建築、冬暖夏涼!」日本人が建てた建物は冬に暖かく、夏は涼しいのです!」

てた建物は冬に暖かく、夏は涼しいのです!」

文化広場から吉林大学第一医院(旧軍事部)を望む



と答えたそつだ。たとえ侵略者が置き去りにした記録でも、それが優れたものであれば積極的に利用するという中国人の合理性を見事に説明したエピソードでもある。

## 「満州国」を知るための本

- 山室信一『キメラ 満洲国の肖像』(中公新書、1993年)
- 越澤明『満州国の首都計画』(ちくま学芸文庫、2002年)
- 北岡伸一『後藤新平』(中公新書、1988年)
- 愛新覚羅・溥儀著、小野忍他訳『わが半生 上・下』(筑摩書房、1977年)
- 中山隆志『関東軍』(講談社選書メチエ、2000年)
- 青江舜二郎『石原莞爾』(中公文庫、1992年)
- 石原莞爾『最終戦争論・戦争史大観』(中公文庫、1993年)
- 大杉一雄『日中十五年戦争史』(中公新書、1996年)
- 馬場伸也『満州事変への道』(中公新書、1972年)
- 藤原書店編『満洲とは何だったのか』(『環』藤原書店、2002年vol.10)
- 原田勝正『満鉄』(岩波新書、1981年)
- 戸部良一『日本陸軍と中国』(講談社選書メチエ、1999年)

本文執筆に際し、上記文献を参照しました。